

詩編 27 篇 1-14 節

主イエスの麗しさを仰ぎ見る

27:1 【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。27:2 悪を行う者が私の肉を食らおうと、私に襲いかかったとき、私の仇、私の敵、彼らはつまずき、倒れた。27:3 たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れない。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。27:4 私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。27:5 それは、主が、悩みの日に私を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかな所に私をかくまい、岩の上に私を上げてくださるからだ。27:6 今、私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私は、その幕屋で、喜びのいけにえをささげ、歌うたい、【主】に、ほめ歌を歌おう。27:7 聞いてください。【主】よ。私の呼ぶこの声を。私をあわれみ、私に答えてください。27:8 あなたに代わって、私の心は申します。「わたしの顔を、慕い求めよ」と。【主】よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。27:9 どうか、御顔を私に隠さないでください。あなたのしもべを、怒って、押しのけないでください。あなたは私の助けです。私を見放さないでください。見捨てないでください。私の救いの神。27:10 私の父、私の母が、私を見捨てる時は、【主】が私を取り上げてくださる。27:11 【主】よ。あなたの道を私に教えてください。私を待ち伏せている者どもがおりますから、私を平らな小道に導いてください。27:12 私を、私の仇の意のままに、させないでください。偽りの証人どもが私に立ち向かい、暴言を吐いているのです。27:13 ああ、私に、生ける者の地で【主】のいつくしみを見ることが信じられなかったなら——27:14 待ち望め。【主】を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。【主】を。

はじめに

27:4 「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」

今日のタイトルは、この御言葉から「主の麗しさ」を取って、それにイエス様の名前を入れて完成させました。詩編を書いたダビデ王はイエス様が生まれる1000年程前に生きていましたが、詩編を通して救い主であるイエス様の事を沢山預言として書きました。イエス様が唯一、神様の美しさを完全に現わせる方です。それでイエス様は次のように断言しました。「私を見た人は父を見たのです。」と。

ルカ24:44. 「さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。私についてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」

ダビデ王が見た主の麗しさは今、私達が見られるのと同じ麗しさですが、見られる場所が違います。イエス様が十字架で死んで旧約の神殿の幕が割けるまでは、限られた人と限られた場所でしかそれが見られませんでした。

今イエス様を信じる全ての人はいつでも、どこでも、イエス様の麗しさを見られる素晴らしい特権が与えられています。その条件はダビデ王が書いた通りです。「この一つの事を主に願った。それを求めている。」つまり、他のどんなものよりも、第一に主を求める事です。

エレミヤ書29:13. 「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」

他の物や人をイエス様より大切にしたいと求めるなら、見付ける事はありません。

1. 初めて主の麗しさが見られる時

詩編27:1「主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。」

初めて主の麗しさが見られるのは、イエス様の光によって個人的にイエス様を自分の救い主として見ることができる時です。特に十字架の上にいるイエス様を仰ぎ見て自分の罪の為に死んで下さった事を信じて受け入れる時です。

イザヤ書45:22「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。」

もちろん、イエス様を神の独り子として唯一の救い主であることを信じる事です。

イエス様とその当時の国の指導者でパリサイ派のニコデモと言う人との会話を見たら、それが明白です。イエス様は人は新しく生まれなければ神の国を見る事が出来ないと説明した後の続きです。

ヨハネ3:14-16「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません15

それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。

16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

イエス様は自分の生まれる1500年前に旧約聖書に書かれた出来事が自分の十字架による救いを指して書かれたと言って、私の十字架を仰ぎ見る人は皆、救われると断言しました。

民数記21:9. 「モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけた。もし蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた。」

十字架の上のイエス様を仰ぎ見て信じる人は滅びる事がなく、永遠の命を持つと言う神の救いです。

それは初めて主イエスの麗しさを見られるようになって、今日の詩編27:1にあるように「主は私の光、私の救い」というその言葉が真実として自分の体験で分かるようになります。人はそれを体験するまで主の麗しさが全く見えないで神様に対して盲目の状態なのです。使徒パウロもそれを説明しています。

コリント第二4:4-6「そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。5 私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。6 『光が、やみの中から輝き出よ。』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。」

十字架上のキリストの顔にある神の栄光を見られる人の心を、全ての光を作られた神が個人的に照らしして下さり、暗闇と魂の死、そしてその恐れから、開放されます。

2. 主の麗しさを仰ぎ見て強められる。

詩編27:3「たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れぬ。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。」

これはすごい信仰の確信を表しています。ダビデは旧約聖書の列王記のエリシャと言う預言者の事を思いだしているかも知れません。敵軍の陣営に囲まれて怖がっていた若者にエリシャは言いました。「恐れるな、私達と共にいる者は、彼らと共にいる者より多いのだから。」それから、若者の目が開かれて見えるように祈ると、なんと火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちた、と書いてあります。ダビデ王は別の詩編にこう書いています。

詩編34:7「主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。」

御使いは皆、救いを相続する人々に仕える為に遣わされている、と聖書に書いてあるから、全てのイエス様の信者にこの特権が与えられています。

ダビデ王がこのような強い信仰の確信を持つことができた秘訣は次の4節にはっきり書いてあります。

詩編27:4「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」

これは、一日だけではなくて毎日祈りによって主の麗しさを求め続ける事を言っています。「私の命の日の限り」と言うのはこの地上にいる限り、毎日祈り求めるという意味です。毎日、祈りを優先する強い決意を表しています。その後の8節の言葉に明確に書いてあります。

詩編27:8. 「あなたに代わって、私の心は申します。「わたしの顔を、慕い求めよ。」と。主よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。」

もちろん、主の顔を慕い求めるという意味は祈り求める事を優先して祈る事です。当然、私達も、このように強い決意を持って優先的に祈り続ける事が必要です。

イエス様も、諦めないで祈り続ける大切さを教えました。

ルカ18:1. 「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」

例え話を全部読む時間はありませんが、「不正な裁判官の例え話」と呼ばれています。つまり、私達の目から見て神様は冷たくて自分の事を何も気にかけていないから、祈る意味は無いと思ってしまいやすいという意味です。それで、強い決意を持って絶対に毎日優先的に祈りの時を持つ事を決めたら、この詩編に書いてあるダビデ王の体験は自分の体験になるのです。つまり、大変な事情の中でも、敵に囲まれていても、自分の命は神様の御手の中に隠れて守られているから、ひどい困難の中でも、賛美ができるのです。6節には

詩編27:6「今、私のかしらは、私を取り囲む敵の上に高く上げられる。私は、その幕屋で、喜びのいけにえをささげ、歌うたい、主に、ほめ歌を歌おう。」とあります。

もちろん、今、私達の捧げられる喜びのいけにえは感謝の祈りと賛美の歌です。

使徒の働き16:25-26「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。26ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。」

使徒パウロと仲間シラスはひどい目に遭ってむちで打たれ、牢獄で一番酷い所に入れられた後で祈りと賛美を捧げていたところ、全能の神の力が働いて地震が起きました。その続きは、刑務官とその家族全体がイエス様に導かれて救われたという内容です。先週に話しましたが、私が救われた場所はその当時、世界一悪名高い刑務所と呼ばれていた場所でした。テロリスト専用の刑務所でしたが、沢山の人がその後でイエス様によって救われ、牧師になった人も少なくないし、敵同士だった人々が和解して、命をかけても、一緒に平和の為に活動するようになりました。

ダビデ王は主の顔を慕い求めて主の麗しさを仰ぎ見る事によって信仰の確信が増々強められていました。

詩編27:10「私の父、私の母が、私を見捨てるときは、主が私を取り上げてくださる。」

ダビデは、神様の愛は自分の親の愛よりも、大きくて永遠に変わらない愛だと言う確信に満ちていました。もちろん、新約聖書の使徒パウロも同じ経験からこう書きました。

ローマ8:37-39「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。38私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、

39高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

詩編27:14「待ち望め。主を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。主を。」

3. 主の麗しさを仰ぎ見て変えられる。

コリント第二3:18「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

この3章の箇所を読めば、イエス様を信じて神の子だとされる特権が見えて来ます。ここでは旧約聖書のモーセの時代と比べて書かれています。モーセは十戒を神様に与えられた時に、40日間山の上で神様との交わりを経験し、下りて来た時、顔が神様の栄光で光っていました。本人は気が付

いていませんでしたが、他の人々には見えていました。その当時は他に誰も、そんな神様との個人的な交わりが許されていませんでしたが、今は全てのイエス様の信者に与えられています。コリント第二**3:16-17**「しかし、人が主に向くなら、そのおおいに取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。」

イエス様は自分の全ての信者に与えられている御霊によってその心の自由を与えられています。全ての罪を赦されて清められて神様と自由に交わる特権を与えられています。祈り求める時に、特に第一に主の顔を慕い求める時にその交わりの深い経験を与えられて私達の心が何よりもそれによって変えられて行きます。顔が光るかどうかは別として、人格が何よりも、主の美しさを表すようになるのです。これは私達の救われた最大の目的でもあるし、一番自分の心が満たされて不満から開放されている状態です。

ローマ**8:29**「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。」イエス様の人格の美しさの一番の特徴は何でしょうか。イエス様ご自身で自分の人格の説明をされたのを見て下さい

マタイ**11:28-30**。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**29** わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。**30** わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

29節に「私は心優しく、へりくだっている。」とイエス様自身は自分の人格を説明しています。どうでしょうか？この二つの特徴で私達がどこまでイエス様のように変えられているかが一番分かりやすいです。心が優しくへりくだっているという意味を聖書で学ばないと分からないのは、聖書とこの世的な考えと違うからです。イエス様の優しさと謙虚さは続きの箇所書いてあります。

マタイ**12:19-20**「争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない。**20** 彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは。」

簡単にまとめていいますと。自分の思いや自分の意志を他の人に押し付けないから、人と争う必要がありません。逆に傷ついた人と弱っている人を大事に守って強めて育ててあげる人格です。それで、全て、疲れた人、重荷を負っている人に招きを与えておられるのです。疲れを癒して力を付けるからです。「私のくびきを負って私から学びなさい。」と言うのは苦勞させて更に疲れさせる為にはありません。残念ながら、教会に来て更に苦勞させられて、更に疲れて帰るなら、イエス様から学んでいると言えません。イエス様がくびきを共に負いたい理由は、あなたが弱っている時に、疲れている時に、更に重荷を負わせるのではなくて、「私はあなたの分まで背負ってあげるよ、私はあなたに私の力を与えてあげよう」と言って招いて下さっているのです。

まとめ

宗教と言うものは人を余計に疲れさせて、余計な重荷を人々に負わせるだけです。イエス様の当時の同国民は宗教の指導者達に大変な重荷を負わせられて大変な苦勞をさせられていました。その宗教的な重荷から、人々を開放して休ませてあげたいから、宗教の代わりにご自分と個人的な親しい関係を持つように招かれたのです。その個人的な関係の中でイエス様は、全ての信者に主の麗しさを見させて下さいます。